

***** 目次 *****

P1 新副代表のご挨拶	大沢 金呉
P2 仲間たちの近況報告 (1)	
1 班	村上 好子
2 班	斉藤 和江
P3 仲間たちの近況報告 (2)	
3 班	青木 茂
4 班	藤原 泰子
P4 私の玉手箱	藤田 憲治
P5 写真コーナー	吉川 時子
P6 樹形ウォッチング	遊上 眞一
P7 自由コーナー	西村 彦二
P8 リレー随筆	前田 長治
書道コーナー	今本 芙佐子
P9 絵画コーナー	根崎 明義
俳句・川柳	山上 恵子

◇自然と文化だより◇

6月以降天候不順等による科の活動中止が続きました。そのせいもあり、野外活動の機会も減少し、体力が少し衰えたように感じます。紅葉の季節には天候が良くなることを期待したいと思います。

今号も皆様のご協力により9ページにすることが出来ました。

「書」の掲載は初めてではないかと思ひます。最終ページの広報委員会からの一言欄を今号より各班の広報委員が担当することになりました。今号は2班の玉尾洋一さんが作成しました。

N.A

～新副代表のご挨拶～

副代表と観察専任幹事の二足のわらじ

副代表 大沢 金呉

自然と文化科に入科して2年目で訳も分からぬまま観察の専任幹事、3年目で副代表という大役を仰せつかりました。

当科の理念は、ご承知の通り「自然の営みを理解し、人の活動を歴史的に捉え、人と自然の付き合い方を考察し、社会との連携を深める」というものであり、皆さんはこの理念を理解し、共感して様々な活動に参加して下さっています。

私が専任幹事を務める観察委員会は、この理念にもとづく活動の一環として植物観察を中心とする自然観察会を企画しています。企画委員会の歴史文化散策とともに当科の活動の2本柱の一つで、いつも企画の内容には苦慮しています。

さて、入科して初めて気づいたのですが、自然と文化科には、植物のみならず、地質や宇宙、鳥など自然に関する豊富な専門知識をもった方々がたくさんいらっしゃいます。しかもみなさん年齢に関係なく、学ぶことに貪欲でアクティブです。宮澤代表も昨年の自然と文化だよりで「こういう方々が科の魅力を高めている」とおっしゃっています。同感です。自然と文化科は人材の宝庫です。こういう魅力的な方々のご協力を得ながら、「互いに切磋琢磨して、自然を多岐に学び、しかも参加して楽しい」自然観察会をモットーに今後も活動を企画していきたいと考えています。

また、今年新たに加わった役職、副代表とは、代表の補佐役、代表に事故があった場合の代行としか規約に規定がありませんし、よく分らない曖昧模糊とした役職です。が、科の運営に関して少しは物申せるポジションなのでしょう。大それた抱負などはありませんが、何が出来るのかを少しだけ考えてみました。

まず、①ほとんどの科員の皆さんが、現役時代には、仕事一筋で成功や栄誉や勝つことにこだわり過ぎて、置き忘れてしまっていた「大好きなことに熱中する幸せ」を感じることをするような環境づくりのためのお役に立つこと。

②科の継続や発展のために何が課題でどんな解決策があるかなどを科員の皆さん一人一人が、自由闊達に議論が出来るような風通しの良い組織運営に努めること。

③入科年次の新しい科員の皆さんのよろず相談相手になること。・・・などでしょうか。

いずれにしても、諸先輩を見習って「生涯学習」の気持ちで忘れず、今後も自然と文化科の活動に微力ですが、力むことなく、貢献していきたいと思っています。



2018 年 夏報告

1 班 村上 好子

今年のお盆も下関にお墓参りに行った。

下関には、99 歳の伯父が住んでおり、会うたびに「会えるのも今年で最後やな。」と言いながらも、元気で、饒舌に昔話をしてくれる。伯父の青春時代の話聞くのが楽しい。

今回の山口観光は、まず、「火の山公園」へと向かった。関門橋、関門海峡を挟んで下関市街と門司港、巖流島や、様々な船が行きかう様子をのんびりと眺めた。プラタモリで関門海峡の両側にある二つの高い山はもともと一つの山だったということを知って眺めると感慨深い。豊臣秀吉も関門海峡を渡るのに苦労したらしい。まさに「関門」だったと想像するのも面白い。暑かったけどそんなことを考えていると時間はすぐに経つ。

次に訪れたのは角島。北長門海岸国定公園である角島と本州をつなぐ全長 1780m の角島大橋を渡った。空は青空、コバルトブルーの大海原を車で渡る。波によって、色が変わる美しい海の様子に興奮気味。カメラのシャッターを押しまくりだった。そのあと角島では海水浴を楽しんだ。

翌日は元乃隅稻成神社へ行った。参道から 123 基もの赤い鳥居が並ぶ景観は圧巻。大鳥居の上に設けられた賽銭箱に賽銭が入ると願いが叶うと聞き何度も何度も試す人、多数。私も玉入れの要領でトライするも残念ながら入れることができず断念。少し心残り。

ここは海蝕地形が多く龍宮の潮吹きと呼ばれる現象がみれるらしい。長い年月をかけて自然がつくり上げるものに感動だ。



山口は見どころ満載！

来年も伯父の話聞きに山口を訪ねようと思う。

故郷は遠きにありて思うもの

2 班 斉藤 和江

今年の5月母の3回忌の法事があり、帰省した。今回は2年ぶりなので久しぶりではないが、遠慮なしに田舎に帰れるのは、とても嬉しい。

裏山の墓参りを済ませ、道端の草や木を見ながら山を下りていると、下から兄の「おーい何しよんなら」岡山弁の怒鳴り声が聞こえる。慌てて駆け下りると近くの国民宿舎の送迎バスが待っていた。あ、そうだ。忘れていた。田舎でもこのような催しがあると、自宅ではなく外部で食事をするのが、今は普通なのだ。田舎の親戚筋と食事をしながら、どここの誰々がな……と話も盛り上がるが、私は早くに田舎を出たのでどこどこも誰々も全くわからない。だけど慣れ親しんだ遠慮のない言葉を耳にするのは、時間のたつのを忘れる。

帰る段になり今度は90近くになる叔父が靴がないと大騒ぎ。やっと兄の突っ掛けを履いてきたことが分かり一段落。そんなこんなで実家に帰るともう大阪に帰る時間。在留時間は3時間ほどだ。日帰りだから仕方がないのだけれど、それだけではない。この家は私の生まれ育った家だが、それは、祖父母や父母が元気でいた頃のこと。兄が跡を取り今は甥の世代。農業と神戸まで通って仕事をこなし、土地も家もここまで大きくしたのだ。兄には本当に感謝している。今更何をかいわんやだ。今頃は定年後より始めたブドウの収穫に忙しくしており、毎年親戚や近所に配ってくれる。

ずばり『故郷は遠きにありて思うもの』室生犀星の名句だが、故郷の山や川の景色は子供の頃と何ら変わらず、脳裏にしっかり刻み込まれている。

自然学で7月世界自然遺産青森県の白神山地、8月は世界農業遺産宮崎県の高千穂郷・椎葉村を訪ねた。白神山地のブナの原生林、平家の落人が逃げ延び住み着いた椎葉村とは、ともに山また山のさらなる奥地で自然の厳しさは想像以上だ。

白神山地の緑の深さ、シャキシャキしたミズの塩漬けや炒め物。とりわけ椎葉村では塩辛い梅干しに貴重な蛋白源であろう山女の甘露煮や猪肉、ソバやヒエ。焼畑農法を今に伝え、自給自足に近い生活を支えた自然の恵みや先人の知恵、助け合いの精神などを知ることができた。蜂蜜入りの梅干しを食べ慣れている今の私には、到底生活できない土地柄だが、地元の方々との温かい出会いと交流は、何と言ってもこの旅の1番の収穫である。

一本のクスノキから仏像へ

3班 青木 茂

昨年、クスノキについて調べる機会があった。クスノキは防虫効果と材が柔らかく加工しやすいことから古代の丸木舟・飛鳥時代（7世紀）の仏像・家具に利用されていた。また医薬品や街路樹にも利用されているそうだ。木彫の仏像と言えばヒノキが使われていると思い込んでいたので、仏像に使われていたことに驚いた。

そこで、クスノキを使っている飛鳥時代の仏像を探してみると、以外にも近くの法隆寺や中宮寺にあることが分かった。法隆寺夢殿にある「救世観音像」や中宮寺本堂にある「菩薩半跏像」である。公開している「菩薩半跏像」を久し振りにもう一度ゆっくりと鑑賞したくなった。中宮寺に一歩足を踏み入ると、法隆寺の賑わいに比べ訪れている人も少なく静かであった。「菩薩半跏像」は写真で見るとより小さく感じられたと同時にこの仏像のもつ優しい雰囲気魅了された。アルカイックスマイルからくるもので、中宮寺のパンフレットにも「世界の三つの微笑像」と呼ばれていると記載されていた。後の二つは、エジプトのスフィンクス、レオナルド・ダ・ヴィンチ作のモナリザである。仏像の前に座ると一瞬俗世を忘れ、おだやかな気分になった。又飛鳥時代の木彫技術の素晴らしいさにも目を見張った。

次の日、広隆寺の「弥勒菩薩半跏像」を拝観に行った。酷暑のためか広隆寺を訪れる人は2〜3人だったので、ゆっくりと仏像に対峙することができた。広隆寺の展示資料では、この像の材は、アカマツで、朝鮮半島で造られ日本に「献上」されたものであると記載されていた。しかし、詳しい調査で経帯や背板はクスノキ製であったので、日本で造られたという二通りの考え方があるそうだ。真実は謎に包まれたままだが、国宝第一号の弥勒菩薩の微笑のみ知っているのかもしれない。

二つの仏像を拝観して、クスノキのもつ奥深さの一端を知ることができた。機会があれば、さらに法隆寺の「救世観音像」をはじめ、クスノキ材の仏像を拝観して仏師の思いにも迫ってみたい。



中宮寺



広隆寺の蓮と新霊宝殿

夏の旅

4班 藤原 泰子

7月末に山仲間と涸沢カールへ行き、沢山の高山植物を見てきました。自然大学に入るまでは夏山に行っても花の名前はほとんどわからなかったのですが、今回は今までと違い1つ1つ見て楽しんだり写真を撮ったりと、自分でも随分変わったなと思いました。入学して2年半たったので、少しは花の名前もわかり夏山も楽しみが1つ増えて嬉しくなりました。

クサボタン、タマガワホトトギス、ミヤマタニソバ…40種類位確認出来て、帰ってから写真を見て暫く余韻に浸っていました。

その後すぐ、本科風組の時の同期と4人でピレネー山脈、バスク地方、アンドラ公国の旅に行ってきました。目的の1つはピレネー山脈に咲く高山植物を見る事でした。



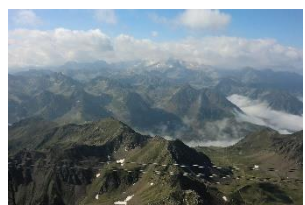
ガバルニー渓谷、ピレネー国立公園のゴープ湖をハイキングして自生の高山植物を見ましたが、ほとんどわからず、現地ガイドに聞いても専門ではない為あまり分かりませんでした。雄大な景色の中で可愛い色々な花を見る事ができて、4人共大満足！



何枚か写真を撮り、帰ってから図鑑やインターネットで調べて楽しみましたが、その中でエリンジウム(セリ科)という名が

エリンギと似ているなと思っていたら、あるサイトで“エリンギはエリンジウムの枯死した根に寄生する事からその名がついた”とあり驚かされました。その他、ヤナギラン、エゾカワラナデシコ、シラタマソウ、ノコギリソウ…が確認できました。

植物だけでなく、ピック・ドゥ・ミディ展望台(2877m)で見た全長430km、幅100kmのピレネー山脈の色々な頂きを見て、日本アルプスとは違う雄大な素晴らしい景色にみんな大感激!!



自然大学の仲間と過ごした9日間の旅はこの夏の素敵な思い出となりました。

私の竜宮城

2班 藤田 憲治

私は赤ん坊でハイハイが出来る様になった頃、玄関の靴脱ぎ石の上に落ちて左目頭を切り、母と祖母が近所の医者へ駆け込んだ。医者が言うには「あと十分遅かったら筋が切れて眼球が裏返り失明していた」らしい。私が小学校へはいる頃に聴かされたが、実は祖母も小学校低学年の頃、縄跳びの縄が右目にあたり失明して義眼を入れていた。一度だけ義眼を取り出してガーゼで拭いているのを見て怖くなった。父が仕事から帰ってきて、二人もいて私から目を離したことをとても怒ったらしい。

私の家庭の家族構成は父、母、祖母、妹の五人で、父がサラリーマンで仕事に出かけた後は男は私一人であった。子供の頃の遊び相手は近所の妹の女友達二人と、小学校高学年までは七割が女の子であった。

私の祖母は和裁が達者で、京都大丸百貨店の外商から和服の御用達を受けて居られた業者さんが居り、祖母に専門に和裁を依頼して来ていた。

昭和二十七年頃、宇治市に日本レーヨン（後のユニチカ）という製糸会社があり、その女子工員さんがたくさん居られて花嫁修業として和裁を習いに来て居られた。午前の部、午後の部、夜の部と、常に七、八人が居られた。私は幼稚園から帰ってくると祖母にまわりついて遊んでいたが、お針子さん達と一緒に宇治川などへ散歩に連れて行ってくれた。祖母は左目しか見えないので遠近感が無く、針に糸を通しにくく私にお手伝いさせていた。中学生の頃におそろおそろお針子さんの月謝を聞いてみると五百円とのこと、今の価値に換算するとかなりの額らしい。

祖母の裁縫箱は抽斗が三段程付いていてその背面に針山を乗せる板が立っていた。抽斗の中にはチャコ・指ぬき・糸切り鋏・裁ちばさみ・まち針・縫い針・縫い糸・しつけ糸などが収納されていた。それと、私への毎日のお小遣いと・・・。

お針子さんののは、五十センチくらいのくけ台の上に針山をのせる物で折り畳み式の物であった。

反物は、幅が約三十六センチ、長さ約十二メートルでこれが一着の和服に仕上がるというのは驚きだった。洗い張りを手伝わされていたのでよく分かった。布海苔を溶いて柔らかい刷毛で洗った布地に塗って、信子（しんこ）張と言い、竹ヒゴ

の両端に二ミリ程の針を付けた信子棒で針を打って張りを持たせて、軒下で乾かし、新しい和服に仕立てるのである。

子供ながらに和服の種類を自然と覚えた。小紋・振袖・留袖・訪問着・付下げ・小袖・浴衣・コート等。そして私の成人式にあわせて羽織袴を縫ってくれた。今でもタンスの奥に寝ている。その二年後に祖母は享年六十七で鬼籍に入った。

（※本年9月2日が祖母の五十回忌でした。）

私は高校から大学時代まで週二回アルバイトをしていたが、そこも二千円程の中で男性は三十人程だった。お弁当を作ってくれ年下の女性があり、舞い上がっていてまさに竜宮城状態だった。

大学に入り混声合唱団に入部して六年間も部活動に現を抜かした。その後バイト先の女性（お弁当の女性ではない）と学生結婚をし、食べるために就職をした。

私の竜宮城は此処で終わったようである。

その後、大阪へ出てきてマンションを購入したらしい。家二軒分をたてられる程の大きな借金をして何とか全額返済できたらしい。バブルの頃の金利は高かった。嫁に名義を移したマンションがあるのに嫁の退職金で家を建てたらしい。息子が結婚して孫娘が二人出来て、息子も家を建てたらしい。自分が脳細菌性髄膜炎で死の淵を彷徨い、その五年後に腹水・胸水が十四リットルも溜まって二ヶ月も入院したらしい。頭を八針も縫うけがをし、その後肩口を十八針も縫う怪我をしたらしい。風呂場の鏡を見るたび、何時の間にこんなに老けた？竜宮城から帰って何時玉手箱の蓋を開けたのだろうか？煙を被った覚えはないのに。

裁縫箱





ハリエンジュ



シダレヤナギ



アキニレ



スギ



ヒマラヤスギ



クスノキ

◆◆◆ 動物による、幹への害 ◆◆◆

1班 遊上 眞一



ツキノワグマが、スギの樹皮を剥いて
形成層を なめていました (芦生の森)



台湾リスが、クロガネモチの平滑な樹皮を
食んで 抽象画に 仕上げました (友ヶ島)



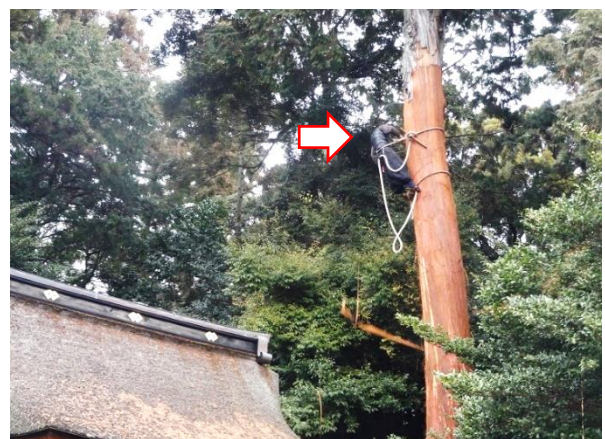
シカが、大好物のリョウブの樹皮を
かじった直後で、まだ緑色 (箕面の森)



シカが ウワミズザクラの幹で 角研ぎ
(箕面の森)



フウの剪定こぶ 毎年 一定の箇所
で剪定するとコブが発生します
見た目は悪いが、この部分は 活力が高く
腐朽に対する防御力も 極めて高いのです



原皮師 (モトカワシ) が、振り縄 1 本で 10m の
高さまで登って、檜皮を採取 これを 75cm の
長さに揃えて、神社仏閣の屋根を 葺く
10 年後には、また採取できます (野洲市 御上神社)

長命草と延命草と延齡草

4班 西村 彦二

我々シニア世代にとって「長寿」は関心のあるところですが、先日、神戸薬科大学の薬草園を見学した時、前を歩いていたグループが「長命草」の名札を見て、「これボタンボウフウのことやで！」という声が聞こえてきました。たしか「ヒキオコシ」も同じように呼ばれていたのではなかったか？早速、家に帰って調べてみると「ヒキオコシ」は「長命草」ではなく「延命草」であること、他に「延齡草」というのもあり、それぞれ薬草として利用されていることを知りました。その結果をお裾分けします。

長命草は、沖縄諸島の与那国島などの海岸の岩場に自生するセリ科カワラボウフウ属の常緑多年草で別名「ボタンボウフウ」。沖縄では昔から刺身のツマや和え物にして食べられ、「長寿の秘訣」として代々受け継がれてきた。そして近年の研究などで本種はビタミン、ミネラル、植物繊維などの美容成分をバランスよく含んでおりポリフェノールはゴーヤの8倍であること、また高い抗酸化作用があり排尿促進や血流改善などにも有効であることが明らかになった。



長命草(ボタンボウフウ)

延命草は、日本各地に自生するシソ科ヤマハッカ属の多年草で別名「ヒキオコシ」。昔、弘法大師が山道を歩いていると一人の行者が倒れており、大師がこの草を絞ってその汁を口に含ませたところ、たちどころに元気を取り戻し旅を続けることができたことから、病人を「引き起こす」という意味で「ヒキオコシ」と呼ばれたという。全草を乾燥したものを生薬で「延命草」といい、健胃薬として消化不良、食欲不振、腹痛などに用いられる。



延命草(ヒキオコシ)

延齡草は、日本では北海道～九州の低地や山林の湿ったところに生えるユリ科エンレイソウ属の多年草。サポニンを含む毒草だが使い方によっては薬にもなり、食べたものを吐き出させる効果がある。昔は食べ過ぎや食あたりになった人にこの草の根を煎じて飲ませて命拾いしたことから「延齡草」という説がある。また本種の寿命が30～50年と長いからとの説もある。中国では根茎を「延齡草根」と呼び、古くから胃腸薬や催吐剤などの薬草とされる。



延齡草(エンレイソウ)

登山における標準コースタイムとGPS

2班 前田 長治

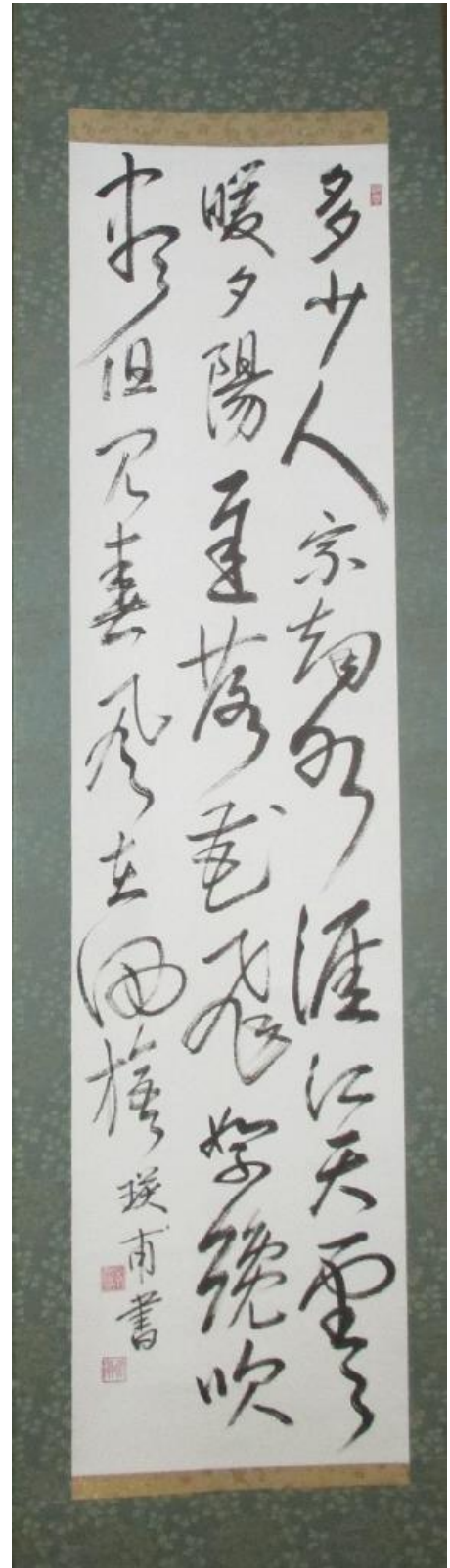
登山を計画する段階で、一番問題なのは、登山口から山頂までに掛かる時間となります。ほとんどの方は、昭文社の山と高原地図を参考にされていると思います。しかし、近郊の低山等には、この地図がありません。そんなときどうしますか。日本の山の登山ルートでは、高低差 300m を登るのに、1 時間かかるとの経験則があります。意外と、これが当たります。鹿屋体育大の先生は、「芦屋川—ロックガーデン—風吹岩—雨ヶ峠—七曲—山頂までを 3 時間以内に登れる人は、北アルプス等の夏山縦走ならこなせる。」と発表されています。実際に、芦屋川から六甲最高峰は、ほぼ 900m ありますので、この経験則は正しいと思われます。

300m—1 時間をもう少し詳しく説明しますと、日本の山の登山ルートの斜度は $15^{\circ} \sim 20^{\circ}$ になっているとのことです。斜度 17° では、 $\tan \theta$ で計算しますと、1 km 行って、300m 上がることになります。次に 1 時間の内訳ですが、水平距離 1 km の歩行時間が 15 分、300m 高度差を稼ぐのに、45 分掛かると考える様であります。

北アルプス三大急登は、早月尾根：馬場島(740)—劔岳(2999)=2259m (約 8 時間)。合戦尾根：中房温泉(1470)—燕岳(2763)=1293m (4.3 時間)。ブナ立尾根：高瀬ダム(1250)—烏帽子岳(2628)=1378m (約 5 時間)となります。因みに、 θ は、早月尾根は、 17.9° 、ブナ立尾根は 15.4° 、合戦尾根は 14.5° となります。早月尾根と合戦尾根は制覇しましたが、早月尾根は途中の劔岳早月小屋に泊ったので、他の 2 つの尾根と変わらずの 5 時間の登山時間となりました。

次に実行時の問題は、現在位置の確認方法となります。出発地点と到着地点は明確に分かりますが、途中の自分の居場所の確認はなかなかできません。縦走路の尾根上であれば、ピーク、コルなどは地図が熟読出来る様になれば分かりますが、ひたすら斜面を登っているときなどは、なかなか分かりません。そこで、登場するのが、GPS であります。以前はガーミンが独壇場でありましたが、最近スマホのアプリで 2 万 5 千円上での居場所が明確に分かります。これを使わない手はありません。非常に恩恵を受けています。

2班 今本 芙佐子



江南春 堀 正起（景山）

多くの人家は煙の籠めたる水の辺にあり、
江上の天は雲も緩やかにして、夕陽の没するも遅く、
春の日の永くもあるかな。

さて。春風は落花も柳絮も吹き盡つくして
今は唯酒旗を揺るかしひるがえるのみ

絵画コーナー

3班 根崎 明義

称名滝



俳句・川柳コーナー

3班 山上 恵子

川柳

言うことをコロコロ変えたらそりゃ拙い
あくまでも予約で明日の命かな
都合よく忘れてるから生きている

俳句

虫時雨太鼓の音と和しており
秋桜を越えゆく顔の行き来せり
般若寺や路地の地蔵に秋の雨



皆様のお陰を持ちまして「自然
と文化だより」38号を発刊でき
ました。大変ありがとうございました。
今後ともご協力のほどよろ
しくお願いいたします。

(広報委員会)